

聴覚障がい

障がいの特性

聴覚障がいのある高齢者も、一人ひとりの抱える生活上の困難さやコミュニケーション方法は多種多様です。その要因としては、以下のことが挙げられます。

- 失聴年齢：先天的に又は幼少時より聴覚障がいがあり、言語獲得ができなかった方と、音声言語を獲得後、人生の途中で失聴・難聴になった方、また加齢による老人性難聴の方では、同じ聴覚障がいであっても、その特性は大きく異なります。
- 損失聴力：補聴器をつければ聞こえる方から、全く聞こえない方まで様々です。
- 受けた教育：ろう学校に就学していたか、地域の一般校で学んだか、不就学か、により異なります。
- 生活環境や時代背景など

ろうあ者とのコミュニケーション

一般的には、聴力損失が大きく、主に視覚的な手段を使用してコミュニケーションをする人のことをろうあ者といえます。

全く声を出せ(さ)ない人や声を出して話す人、手話を第一言語にする人やそうでない人など、人によってコミュニケーションの方法は異なります。教育歴、生育歴によって、読み書きが難しい人もいます。

ろうあ高齢者の中には戦前戦中に学齢期を過ぎた方もいます。戦前は障がい児に対する教育が義務制ではなかったことや戦争の影響、偏見、経済・交通事情などの理由から、小学校の教育さえ受けられなかった人が多かったようです。このため、集団生活の経験がなかったり、コミュニケーションのとり方がわからなかったり、情報の不足や偏りのために思いこみで誤った判断をする場合があり、誤解を与えることも少なくありません。中には視覚からの情報にこだわり、実際に目の前で起こっていない過去や未来の話、仮定の話については、理解しにくい方もいます。謙遜や冗談も言葉通りに受け止めて不愉快になる事もあります。

また不就学の高齢者への対応は、非言語的コミュニケーション(身振り、ホームサイン(※)、絵、写真、実物を示すなど)の方法も大切です。

※手話を身に付けていない聴覚障がい者が、身近な人とのコミュニケーションに利用する身振り、手振り

中途失聴・難聴者とのコミュニケーション

中途失聴者は、「聞こえなくなった」という障がいを受け入れるまでに時間がかかります。その中で、あらゆる場で情報が遮断されていることに気づき、がく然としながら障がいを認識していきます。

また、中途失聴・難聴者としては、

- 今まで使ってきた音声言語を続けて使いたい。
- 聞き取れないところは文字情報で話の内容を知りたい。
- 緊急事態の場合は目で読める文字情報を出して欲しい。
- 質問には、筆談や身振りをういてわかるように答えて欲しい。

という要望が強い傾向がありますので、留意してください。

聴覚障がい

コミュニケーション方法

「ろうあ者」は、手話を主なコミュニケーション手段としている方が多く、「中途失聴・難聴者」は、通常、補聴器や文字情報等を主なコミュニケーション手段としていますが、目で見てわかりやすいことを基本に、一人ひとりにあったコミュニケーション手段に合わせた配慮が必要です。

例えば、後ろから声をかけても聞こえにくいので、正面を向いて口元や表情を見せて指差しをするなどの配慮が必要です。

【手話】

- 手の形と位置や動きによって表現する視覚的な言語であり、音声言語とは別の体系を持ちます。
- 表情や上体の動きを含めて表現します。
- 一般的には、多くのろうあ者にとって、手話が一番自然な会話方法であり、安心して自分の気持ちや言いたいことを表現できる方法です（そうでない方もいます。）。
- 手話にも方言や年齢によって手話表現が異なる場合もあり、一つの単語の手話表現が一つとは限りません。特に高齢者の場合は独自性の強い手話を使う傾向があります。

【指文字】

- 指の形や動きで五十音を表現するものです。手話と併用して用いられており、手話表現がまだ確定していない新しい言葉や固有名詞などに補助的に使われています。
- 指文字は、必ずしも全ての聴覚障がい者が使用しているわけではありません。特にろうあ高齢者の中には、手話は堪能でも、指文字は知らない人がいます。

【筆談】

- 読みやすい文字と簡潔な文章で書いてください。
- 手話では十分に伝えられるのに、書くと言いたいことの半分も伝えられず、また、書かれた説明の理解が困難な人もいます。ろうあ者の中には自分の要求を文章で伝えるのが難しい人もいます。
- 筆談には簡易筆談器（書いて消すを繰り返せるもの）が便利です。
- 老眼のため字が見にくいことがあるので、文字の大きさには気をつけましょう。

【口話】

- 読話（相手の口形で言葉を読み取る）と発話の総称です。
- 読話は集中力を必要とするため、長時間に及ぶと視覚や精神的に極度の疲労を伴います。
- 通じていると思っていても、お互いに違った内容で理解してしまうこともよくあります。
（例）「たばこ」と「たまご」、「おじいさん」と「おにいさん」、「とうふ」と「ソース」など
口形だけでは判別ができない言葉がたくさんあります。
- 口話ができる人に対して話をする時は、相手に顔を向けて口を少し大きく開けてゆっくりわかりやすい言葉で話しかけます。
- ろうあ高齢者の中には、ろう学校に通い口話訓練を受けていないために、口話の苦手な人が多くいます。

【身振り（ジェスチャー）】

- 日常的に使われている身振りや簡単な指示なら手話を知らなくても通じます。
（例）食べる、飲む、寝る、男、女など

【表情】

- 視覚的情報を重視するため、相手の表情を読み取るので、正面から話しかけてください。
- 顔の表情は重要です。面倒くさそうな顔、困った顔はできるだけ避け、伝えたい感情を込めて相手の顔を見て話しかけましょう。

【補聴器】

- 補聴器は音を大きくする器機です。補聴器をつけると良く聞こえる伝音性難聴の人もあります。一般的に中途失聴・難聴者は、聴覚神経を損傷する「感音性難聴」が多く、補聴器を掛けたから言葉が自由に聞き取れるというものではありません。
- 耳元で大きな声で話しかけるのではなく、正面から「少しゆっくりめ、普通の声の大きさを、言葉を明瞭に」話しかけてください。耳元で大きな声で突然に話しかけるのは厳禁です。めまいを起こすほどの衝撃となることがあります。体調などで聞き取りは左右されます。一人ひとりの聞こえ方が異なるので、どの程度の声で聞き取れるのか、確認しながら話してください。
- 補聴器の効果が望めない重度の中途失聴・難聴者には、手術で人工内耳を装用すれば、少し聞こえを取り戻せることもあります。
- 手術や事故で聴覚神経（内耳）を損傷した人は、補聴器や人工内耳も使えません。専門医に相談するようにしてください。

【要約筆記】

- 話し手の言葉を要約筆記者が聞き取り、書き言葉に直して文字で伝える手段を「要約筆記」と言います。中途失聴・難聴者の主要なコミュニケーション支援方法の一つです。中途失聴・難聴者の集会や会議などでよく利用されます。
- お互いに文字を書いて話し合う筆談とは異なり、第三者である要約筆記者が話を要約して伝えるものです。
- 要約筆記には、書いて伝える「手書き要約筆記」とパソコンを使う「パソコン要約筆記」とがあります。
- 個人や少数者を対象にする場合は、ノートやホワイトボードに書いて伝えるノートテイクによる要約筆記が利用されます。

筆談のポイント

〈要旨を正確に書く〉

長い文章より、必要なポイントを短い日本語の文にして書くようにします。

良い書き方の例：夕食に、食べたいものは何ですか？

悪い書き方の例：もし食べたいものがあれば、夕食にしますので教えてください。

〈漢字を適切に使って意味がわかるように〉

難しい言葉は使わないようにしますが、ひらがなばかりでもかえって意味がわかりにくくなります。漢字を適切に使うと、読めなくても意味が通じやすくなります。

良い書き方の例：夕食に、食べたいものは何ですか？

悪い書き方の例：ゆうしょくに、たべたいものはなんですか？

〈抽象的な言葉や二重否定は使わない〉

抽象的な言葉や二重否定を使うと、誤解を招くことがあります。漠然とした質問や遠まわしな言い方は避け、直接的、具体的に簡潔にまとめると言いたいことが伝わります。

良い書き方の例：今日のお風呂は、2時30分からです。入りますか？

悪い書き方の例：今日の入浴は、2時30分からできないこともないです。お風呂はどうしますか？

〈イラストや絵を書く〉

文章の読み書きが苦手な人には簡単な絵を書いてください。1,2,3と順番をつけたり矢印や○×を使うとわかりやすくなります。

コミュニケーションをとる場合は、「わかりあいたい」という気持ちとお互いに理解しあうことが大切です。